

太宰治「ろまん燈籠」論

— アンデルゼン、グリム、ホームズ、「剽窃」の論理 —

奥 村 淳

(ドイツ文学・比較文学)

はじめに

太宰治の小説「ろまん燈籠」は昭和15年から昭和16年にかけて6回に分けて「婦人画報」に連載された。「その一」は昭和15年12月1日発行の十二月号に掲載され、「その二」は昭和16年1月1日発行の新年特大号に掲載された。しかし「その三」が掲載されたのは2月1日発行の二月号ではなく、3月1日発行の三月号である。「ろまん燈籠」は「その一」から「その六」までの6回連載の小説で、最終回「その六」は昭和16年6月1日発行の六月号に掲載された。山内によれば「『ろまん燈籠』は、太宰の予定では昭和十六年新年号から六回連載ということだったのではないか」(4, 385; 解題)⁽¹⁾という。それが雑誌側の都合から「予定が急遽変更されて」昭和15年12月号からの連載となった。そして「『その一』十八枚は、昭和十五年十一月五日頃までに脱稿したと推定され、また『その二』十九枚も、昭和十五年十二月五日頃までに脱稿したと推定されよう。」「『ろまん燈籠』の『その三』は、『創作年表』で、いったん『二月号』の項に、『小説(ろまん燈籠)婦人画報15』と記載されて、その記載の全体が抹消されている点から、昭和十六年一月上旬頃までにいったん脱稿したのであろうと思われる。けれども、『三月号』の項に、『小説(ろまん燈籠)婦人画報15』と記して『15』の『5』だけを抹消し、『7』と改めている点から、三月号に掲載延期と決まって加筆した可能性が強い。脱稿は一応、二月上旬までと考えておくのが妥当だろう。」ところで「婦人画報」昭和16年二月号の「編集後記」に次のようにあることが注目される。「連載小説である『ろまん燈籠』は作者、太宰治氏が健康を害したので止むを得ず、今回だけは休んだ。幸ひ壺井栄氏の力作を得ることが出来たのは、せめてものお詫びである。」⁽²⁾壺井栄の「力作」とは小説「船路」であるが、それが「力作」かどうかということは検討の要がある。この「編集後記」全体からは、休載に対する雑誌側の無念の気持が感じられはしないだろうか。二月号は昭和16年1月15日印刷納本、2月1日発行であるから、他の号と同じく二月号に掲載予定の「その三」の原稿も、1月5日頃には完成していなければならなかったであろう。年末年始という時期を考慮すると、前年の暮ということもありうる。しかし原稿は完成されなかった。その理由は

太宰の健康問題ではあるまいと考えられるのである。

全集の年譜によれば太宰は昭和15年12月下旬頃には「男女川と羽左」や「青森」などの原稿を書き、12月下旬には「五所川原」を脱稿している。随筆とはいえ執筆活動は継続している。昭和16年1月3日には「池谷信三郎賞受賞のため昭和十五年末に朝鮮京城から・・・上京していた田中英光と、山岸外史などとともに亀井勝一郎宅で酒宴を催した。」（別巻、546）これについては田中自身が「その翌年の正月、重道は・・・正月のお祝いもかね、津島さんのお宅を訪ねると、K・K氏の他に、K・G氏という、津島さんの友人も来ており、重道は、みんなに甘え、いろいろな先輩の宅に連れていって貰い、大酒を飲んだ。」⁽³⁾と述べている。酔っ払った田中が太宰と同じ町内に住む山本有三宅の門柱を引き抜いてそばの玉川上水に投げ込んでしまったのは「その正月のある夜」⁽⁴⁾であるという。それは田中が朝鮮に帰る1月10日までのことになる。田中は「文壇の老大家たち」に対する太宰の「憎悪と軽蔑」を感じ取ってそういう行為に及んだらしい。これは堤重久に対する「おれがあんまり悪口をいうもんだから、田中の英光の奴、その邸の前を通ったとき、じゃあ先生、こうしてやりましょうと行って、太い門柱を抜きとって、前の川に捨てちゃったんだ。」⁽⁵⁾という太宰の述懐に符合する。また「十六年の小正月の伊東への一泊旅行」⁽⁶⁾もあった。この妻美知子との旅行は1月15日のことである。健康を害して連載を休載するような雰囲気ではなく、むしろ生気にあふれている。「奥さまだけではない、太宰さんも、この頃が、つまり昭和16年前後が、精神的にも肉体的にも、一番安定していたように、私には思われる。」⁽⁷⁾昭和16年6月7日には長女園子が誕生した。井伏鱒二宛の「大きい子供で、九百二十匁とか言つてゐます。」（11、236）という葉書からは、父親太宰の素直な喜びが伝わってくる。このころは太宰は「心情的にも、生活的にも、華やかな充溢感と安定感を取得」⁽⁸⁾していた時期であったのである。太宰は「ろまん燈籠」の執筆そのものに苦心したのであり、それが連載の休載という事態になったのではないか。「婦人画報」の連載は2回までは実行したが、しかし、第3回目の原稿執筆には困難があった。美知子の証言によれば「昭和十五、十六年頃はまだ戦争の影響もさほどでなく、太宰の身辺も平穏であった。原稿も注文が多くなって、十五年の後半ごろから、全部ひき受けることができなくなった。」⁽⁹⁾という。太宰は昭和16年2月には初めての書き下ろし小説である「新ハムレット」の執筆にとりかかるとなるが、執筆は順調ではなかった。すでに昭和15年初頭に準備にとりかかっていたことは学生の堤重久の証言から知られるが⁽¹⁰⁾、昭和16年2月23日付けの知人宛のはがきにあるように「長編小説で苦闘してゐます。」（11、233）という状況だった。この「苦闘」はすでに前年12月くらいには始まっていて、「ろまん燈籠」執筆にも影響したということもあるだろう。このように考えるならば「掲載延期」はむしろ太宰側に理由があった。太宰は一度は完成した15枚の原稿に納得できず、一回分を休載して、加筆したのではないか。ただの加筆ではなく、大幅な修正の可能性もある。

「ろまん燈籠」は昭和22年7月に東京の用力社から出版された作品集「ろまん燈籠」に収録された。収録作品は「懶惰の歌留多」「古典風」「ろまん燈籠」「貨幣」「随筆一海・津軽地方とチェホフ・返事」である⁽¹¹⁾。太宰はこの作品集の末尾に「この集には、あまい、ロマンチックとでもいつたやうな匂ひの作品を選んでみた。」(10, 387; 『ろまん燈籠』序)と付加している。作品集の表題が「ろまん燈籠」であることは、それが作品集の中心をなすことを意味している。この小説の主人公がグリムのメルヘン「ラプンツェル」(KHM12)の主人公ラプンツェルと同名であることから、この小説がグリムのメルヘンと深く関連することを意味している。そして「ろまん燈籠」は太宰によれば次のような小説なのである。「万事窮して、たうたう悪事をたくらんだ。剽窃である。これより他は、無いと思つた。胸をどきどきさせて、アンデルゼン童話集、グリム物語、ホオムズの冒険などを読み漁つた。あちこちから盗んで、どうやら、まとめた。」(4, 80)「万事窮して」「あちこちから盗んで」物語を作ったのは小説中の人物ではあるが、しかし実際に「剽窃」したのは作者太宰である。そこで以下においては、太宰がアンデルセン、グリムそしてホームズからどのような「剽窃」を行い、どのような変更を加えたかということを検討し、それによって太宰文学の特質をあきらかにしたい。

1

「ろまん燈籠」は小説「愛と美について」(昭和14年5月出版)と同じ洋画の大家入江新之助の遺族にまつわる小説である。「愛と美について」は「退屈したときには、皆で、物語の連作をはじめるのが、この家のならはしである。」(2, 336)という画家の5人の子供達にまつわる。「偉い数学者」(2, 337)である「老博士」(2, 340)が連作された物語の主人公である。博士は世間的には「世に容れられず、奇人よ、変人よ」(2, 340)と噂されている。博士は外出先の新宿で「四十ちかい、太ったマダム」(2, 344)と出会う。それは別れた妻である。この元妻は「いかにも奇妙な顔の、小さい犬」を抱いている。二人が別れた原因は妻の犬好きにあるらしい。犬道楽をやめたらいつでも帰ってよいという約束であったが、しかし博士はすでに若い女性と再婚したらしいことを否定しない。元の妻が抱く犬の名前はプロである。プロフェッサーのプロだというのであるから、彼女にとって夫と別れたのは不本意であったと思われる。しかし元の妻は元の妻で、自分が再婚することを教える。彼女と別れた博士は、帰宅途中にバラの花を買う。それを手に帰宅した博士は「ただいま!と大きい声で言つて、たいへんなお元気です。」(2, 349)しかし家の中から返事はなく、博士は奥の書斎に入って行く。そこには先ほど別れたばかりの元の妻の写真が飾られているのである。再婚したというのは偽りだったのだ。博士は「机の上に飾られて在る写真に向かつて、話かけ

てゐるのです。先刻、きれいにわかれたばかりのマダムの写真でございます。でも、いまより十年わかいときの写真でございます。美しく微笑んでみました。」(2, 349)というのが兄弟によって連作された物語の結末である。元の妻のいう再婚話も虚構であろう。物語は長兄が博士にイブセンめいた外貌を付加し、5人の兄妹の母が冗談を言って終わりとなる。この物語で提示されているのは愛と美の関係である。博士は妻が若くて美しかった頃は、妻への愛があった。しかし若さも美も永遠ではない。それは写真でしか保持されないであろう。この意味で博士はたしかに「奇人、変人」である。これは美に結びつけた形でしか想定されない愛というものに対する、ユーモアをまじえたアンチテーゼの提出である。太宰が求めるものは小説中の言葉を借りるならば「心の住んでゐる世界」(2, 347)なのである。そこでは愛は美に隷属はしないであろう。

「愛と美について」は昭和15年5月に竹村書房から「書下小説集」として、「秋風記」「新樹の言葉」「花燭」そして「火の鳥」とあわせて出版された。小説集の冒頭に付加された「読者に」には「こんな物語を書いて、日常の荒涼を彩色してゐるのであるが、けれども、侘びしさといふものは、幸福感の一種かもしれない。私は、いまは、そんなに不仕合わせではない。」(別巻, 803)とある。同じ入江新之助の一家が登場する「ろまん燈籠」の「その一」ではこの小説集「愛と美について」に関し次のように述べられている。「まづしい創作集ではあつたが、私には、いまでも多少の愛着があるのである。なぜなら、その創作集の中の作品は、一様に甘く、何の野心持たず、ひどく楽しげに書かれてゐるからである。いはゆる力作は、なんだかぎくしやくした、あとで作者自身が読みかへしてみると、いやな気がしたりする等のものであるが、気楽な小曲には、そんな事が無いのである。・・・愛着は感じてゐても、その作品集の内容を、最上質のものとは思つてゐないからである。冷厳の鑑賞には、とても堪へられる代物ではないのである。謂はば、だらしのない作品ばかりなのである。けれども作者の愛着は、また自ら別のものらしく、私は時折、その甘つたるい創作集を、こつそり机上に開いて読んでゐることもあるのである。」(4, 70以下)そして「その創作集の中でも、最も軽薄で、しかもいちばん作者に愛されてゐる作品」(4, 71)が「愛と美について」であるという。「甘つたるい」創作集の中でもその表題とされた「愛と美について」がもっとも「甘つたるい」ことになるであろう。そして「心の住んでゐる世界」の希求は「日常の荒涼」を「彩色」してくれるであろうし、このような世界ほど「甘つたるい」ものはないであろう。「あまい、ロマンチックとでもいつたやうな匂ひ」の作品が選ばれた作品集「ろまん燈籠」でも、小説「ろまん燈籠」がやはりもっとも「あまい、ロマンチックとでもいつたやうな匂ひ」がするはずである。

「愛と美について」の入江家は「くらしの不安はない。要するに、いい家庭だ。」(2, 336)という状況であった。「ろまん燈籠」にはその入江家の4年後の状況の言及もある。亡くなつ

た人がいたりして「いささか暗くなつてゐるやうである。」(4, 75)とされるが、それは本当に「いささか」にすぎないやうである。先述したように太宰が「ろまん燈籠」を書いた時期は、「新ハムレット」の執筆時期とかなり重複していた。構想の時期を入れるならば全体が平行しているといえる。「新ハムレット」の「はしがき」には「この作品が、沙翁の『ハムレット』の註釈書でもなし、また新解釈の書でも決してないといふ事である。これは、やはり、作者の勝手な、創造の遊戯に過ぎないのである。人物の名前と、だいたいの環境だけを沙翁の『ハムレット』から拝借して、一つの不幸な家庭を書いた。」(4, 127)とある。太宰は「不幸な家庭」と平行して、「ろまん燈籠」で入江家という幸福な家庭を描いたことになる。

入江家の兄弟「五人の合作の『小説』」(4, 79)である物語の主人公の女の子の名前はラプンツェルである。グリムのメルヘン集の「ラプンツェル」(KHM12)と関係があることは明らかであるが、太宰はそれに大きな改変を加えた。そのことを太宰が参考にしたと考えられる昭和4年に初版が発行された金田鬼一訳の岩波文庫本をもとに分析したい。ラプンツェル(Rapunzel)とはドイツ語で野菜の一種である。日本では近年マーシュ(mache)とかコーンサラダという名前で売られているが、知られている野菜とはいえない。北ドイツでは冬場の生野菜として重宝するらしいが、ヨーロッパでも一般的とはいえないやうである。「ラプンツェル」を絵本にした場合、この野菜を正確に描いていないものがあるし、あるいは全く描かないことも珍しくはない。金田鬼一は「ラプンツェル」を「野萵苣(ラプンツェル)」と訳し、「野萵苣は端々しく緑々としてゐましたので、おかみさんは涎が垂れさうになつて、その野萵苣が食べたたくつて食べたたくつて仕方ありませんでした。」⁽¹²⁾としている。

長いこと子どもをほしがっていた夫婦にやっと子どもができる。奥さんは窓から見える魔法使いの女(Zauberin)の庭に見えるラプンツェルが食べたくてたまらない。食べないと死んでしまいそうである。「亭主はおかみさんをはがいがつてゐましたので」⁽¹³⁾野萵苣を取って来るが、二日目につかまってしまう。魔法使いは生まれる子どもを自分に渡すなら許すという。「子供は幸福にしてやる。あたしはその子を母親のやうに世話をしてあげる」⁽¹⁴⁾というのである。亭主は子供を渡す約束をしてしまう。やがて子供が生まれると魔法使いの女がやって来て、その子にラプンツェルと名前をつけて連れて行く。そしてラプンツェルは美しく成長するが、12歳になると魔法使いの女によって森の中の塔の頂上に閉じ込められる。戸口もはしごもなく、てっぺんに小さな窓があるきりの塔である。女は下から「ラプンツェルや、ラプンツェル、あたしのところへお前の毛髪をさげとくれ」と呼びかけ、ラプンツェルの長い金髪を垂れさせて上に上がる。3, 4年後に国の王子が森に馬でやって来てラプンツェルの歌声を聞く。彼女のところに登っては行けないが、心惹かれた王子は毎日やって来ては、ひそかに歌声を聞く。そして魔法使いの女が呼びかけて上に上る様子を見る。そこで自分も模倣して塔に登ることができる。「まだ男といふものを一度も見たことがありませんので」⁽¹⁵⁾初め

はびっくりしたラプンツェルは、王子と話をするうちにこわさもなくなり、「自分を所夫に持つ気はないかと訊いた時には、王子が若くつて美しいのを見て、『この人はゴテルお婆さんよりももつとあたしを可愛がつてくれるだらう』と考へました。それで、宜うございますと言って自分の手を王子の手にかさねました。」⁽¹⁶⁾王子は毎晩やって来る。昼間やって来るお婆さんは気づかなかつたのに、ラプンツェルの、お婆さんは重いけれども、「若様はね、直ぐあたしの傍へ来ちまふのよ」という一言で秘密がばれる。「『ええ、この罰定め、何を吐す！お前だけは世間から離したいと思つてたに、ひとを欺したな』魔法つかひの女はかう言つて、腹立まぎれに、ラプンツェルの美しい毛髪を掴^{つか}みました。それから・・・じよきり、じよきり、毛髪はぶつ切り切れて、美しい三つ編が床に転がりました。それから、婆さんは情容赦もなく、かはいさうにラプンツェルを曠野に連れてきました。」ラプンツェルの曠野での苦勞の始まりである。魔法使いが上から垂らした金髪でラプンツェルがいると思つて上に登つて来た王子の目の前にいたのは魔法使いの女である。「お前はもう彼奴に会ふこた金輪際ないのさ」⁽¹⁷⁾と言われた王子は「悲痛のあまり何がなんだか解からなくなりました。そして破れかぶれで塔から跳びおりました。」命は助かつたが、からたちの刺で目玉が潰れ、目が見えなくなる。そして王子は森の中を幾年もさまよつた末に、ラプンツェルが男女の双子とともに暮らす曠野に入り込む。すると聞き覚えのある声とする。「王子が近寄ると、ラプンツェルはそれと識つて、王子の頸へかじりついて泣きました。ラプンツェルの涙が二滴、王子の眼を湿しましたら、両方の眼は舊の通り明澄となつて、王子は昔のやうにものを見る事が出来ました。王子はラプンツェルをお国へ連れて行きました。王子はお国では大喜びで迎へられました。両人はまだまだ永いこと幸福よく楽しく暮らしました。」⁽¹⁸⁾これがグリムの「ラプンツェル」である。

「ラプンツェル」はドイツ語圏ではグリムのメルヘン集の中でも「もっとも好まれる20のメルヘンのひとつ」⁽¹⁹⁾とされるが、日本では事情が異なる。それは明治時代以降の翻訳史が示している。「ラプンツェル」は明治時代には3回しか翻訳されなかつたのである。「蛙の王さま」(KHM1)は13回、「狼と七匹の子ヤギ」(KHM5)は15回、「ヘンゼルとグレーテル」(KHM15)は7回、「赤ずきん」(KHM26)は9回である。3回というのは「灰かぶり(シンデレラ)」(KHM21)の5回と比べても少ない。「灰かぶり」は明治20年、24年そして42年と時代を通して翻訳された。それに比べて「ラプンツェル」の翻訳は明治39年、42年そして44年のことである。明治時代も末になってからのことになる。日本人にはなにかなじみがたいあるいはわかりにくい要素があつたと考えられる。なによりも野菜のラプンツェルがわからなかつたはずである。明治44年の「家庭お伽文庫」(春陽堂)ではじめて「ラプンツェル」と訳されたが、しかし母親が食べる物は赤くて大きい苺に変えられている。また魔法使いの女は「悪い魔者」⁽²⁰⁾である。挿絵からそれは男であることがわかる。王子とラプンツェルは1回しか会わず、子供も生ま

れない。大正14年の「グリム名著選」（東京博文館）では「ラプンツェル」は「金髪娘」と訳され、子供がほしい夫婦の妻が食べるのは青々とした葉の大根である。したがって魔法使いの女（ここでは魔法婆となっている）が呼びかける言葉は、「大根の子，大根の子」⁽²¹⁾である。魔法婆は娘が王子と会っていたと知って「アー俺（わし）はたうたうお前に騙されてしまった，お前といふ人間を，全く世界から別のものにして置いたのに，たうたうそんな悪い虫が附着いたか」⁽²²⁾と怒り，髪を切って娘を砂漠に捨てる。それと知らないでやって来た王子に対しては「さも毒々しきうに，アツハハハと笑」⁽²³⁾うのである。王子は「あまりの悔しさに，前後の分別もなく」塔から飛び降りて両目が潰れる。王子と大根の子が再会するのは，5，6年後である。子供は女の子がひとり生まれている。

昭和3年の「グリム童話集」（金の星社）は「ラプンツェル」と訳しているが，ラプンツェルは玉菜（キャベツ）と説明されている。「魔女はこの娘を大変可愛がりました。そして，誰かが来て，可愛い々娘を奪つて行きはしないかと，心配してゐました。」⁽²⁴⁾そこでラプンツェルを塔に閉じ込める。王子との密会を知った時は「なに，王子！この悪い阿魔。」⁽²⁵⁾と言って怒る。登って来た王子に対しては「齒をむき出して，唸りながら」⁽²⁶⁾悪態をつく。二人は再会するが，子供については一言もない。この童話集は昭和13年に再版された。ここでは「悪い阿魔」は「悪い女」と改められている。このように金田訳以外はすべて訳者の恣意的な翻訳である。総じて魔法使いの女の行為に焦点が当てられすぎていて，好奇心をあおるだけのようなものが多い。

金田鬼一訳のグリムのメルヘン集「子供と家庭のための童話集(Kinder- und Hausmärchen)」は，まず大正13年に世界童話大系刊行会から「グリム童話集」として出版された。その第二部は昭和2年に出版された。この2冊本は昭和4年に岩波文庫から7巻本として出版され，昭和13年に改版された。その第1冊には昭和13年3月19日付けの序文がつけられている。ここでは「本書はかつて『世界童話大系』の中に収められたものの改譯である」⁽²⁷⁾と説明されている。両方とも個々のメルヘンの日本語題がほとんど同じであり，訳文もよく似ている。また世界童話大系刊行会版は東京の誠文堂から「誠文堂版，世界童話大系」の第1回配本として「グリム童話集 上」が昭和5年11月に，そして「グリム童話集 下」が昭和6年8月に出版された。高価だった世界童話大系版の普及版である。これら一連の金田訳によってグリムのメルヘン集は全体がはじめて正確に日本語に移されたのであり，それによってはじめてグリムのメルヘンをもとにした作家の自由な想像が可能となったのである。太宰が「魔法使いの女」としている Zauberin（女魔法使い）をそのような日本語にしたのも金田が最初である。そして太宰がグリムの童話集を「グリム物語」としていることに注目するならば，太宰は同じ金田訳であっても，世界童話大系本ではなく，岩波文庫本に拠ったと考えられる。岩波文庫の第1冊冒頭では訳者による解説がなされていて，メルヘンというドイツ語の日本語

訳について詳細に述べられているからである。この解説によれば「童話という言葉は江戸時代の山東京伝が『異制庭訓往来』（今から大凡六百年ほど前の書物）にある『祖父祖母之物語』（『むかしむかしぢぢとばばありけり』といふきまり文句で始まる話）を目して『童話』となし、これを、ドウワ又はムカシバナシと訓ませてゐる。」⁽²⁸⁾という。太宰が「ろまん燈籠」においてグリムのメルヘン集を「グリム物語」としているのは、この解説にある『祖父祖母物語』の「物語」に拠ったと考えられるのである。世界童話大系本には「物語」という言葉はないからである。また世界童話大系本は1冊が700ページ近い分厚な本であるので、なによりも太宰の創作スタイルに反するのではないだろうか。

太宰の「ろまん燈籠」では兄妹「五人の合作の『小説』」の主人公である女の子の名前がラプンツェルである。この「小説」は「ろまん燈籠」の「その二」においてようやく始まる。兄妹5人が合作する「小説」がグリムのメルヘン「ラプンツェル」をもとにしているわけであるが、太宰はグリムのメルヘンに大きな改変を加えている。まず発端において女の子は子供のいない夫婦にやっと生まれたのではなく、はじめから「魔法使ひの婆さん」（4, 80）の美しい一人娘である。魔法使いは「悪い、醜い婆さん」であるが、一人娘には優しい。娘のラプンツェルが十四歳の初冬に「馬に乗った綺麗な王子」（4, 81）が迷い込んできて、婆さんにつかまる。十六歳の王子はおいしそうである。王子が魔法使いによって、「『冬籠りには、こいつの塩漬けが一ばんいい。』」と短刀で殺されかけたとき、ラプンツェルが命を救う。「『この子は、あたしと遊ぶんだよ、この綺麗な子をあたしにおくれ。』とだだをこねました。」そこで魔法使いも一晩だけ王子を娘に預ける。そして「蛙の焼串、小さい子供の指を詰めた蝮の皮、天狗茸と二十日鼠のしめつた鼻と五臓とで作つたサラダ」（4, 82）や気味悪い飲み物の食事となる。婆さんとラプンツェルにとってはたいへん美味な食事であるらしい。そのあと王子はラプンツェルの部屋に連れて行かれる。ラプンツェルは王子の顔を覗きこみながら「『お前があたしを嫌ひにならないうちは、お前を殺させはしないよ。お前、王子さまなんだから？』』」と言う。「天使」のような美しい、金髪で黒目のラプンツェルを前にした王子が、涙をぼたぼた落とすと、彼女は「『お前があたしを嫌ひになつても、人に殺させはしないよ。さうなつたら、あたしが自分で殺してやる。』』と顔に似合わぬおそろしいことを言う。「『さあ、今夜はあたしと一緒に、あたしの小さな動物のところに寝るんだよ。』」（4, 83）というが、寝室にいるのはたくさんの鳩や大きな籠の中の十羽の鳥、そして鎖でつながれた鹿などである。ラプンツェルは壁の裂け目からナイフを取り出して、鹿の頸をなでて、鹿に油汗を流させておもしろがる。「『なにが起るかかわからない』」（4, 84）のでナイフを抱いて寝るのだという。王子は問われるままに藁の蒲団の上で森に迷い込んだ次第を物語る。するとその話を聞いたラプンツェルは突然王子を城に帰してやると言い出す。そして王子の身支度をしてやり、パンとハムの食料も与え、鹿の鎖をほどく。この鹿だけが魔法使ひの婆さんよりも

早く走ることが出来るのだという。彼女は泣きながら王子に別れを告げる。鹿は「しゅつしゅつ」（4, 85）という魔法使いの追いかけてくる音に負けないで早く走る。そして「王子は夢みるやうな気持でお城の門の前に立つてみました。」ここまでの部分はグリムの「ラプンツェル」からはまったく独立した内容である。

魔法使いの婆さんは怒って、ラプンツェルを「森の奥の真暗い塔の中に閉ぢ込めてしまひました。その塔には、戸口も無ければ階段もなく、ただ頂上に、小さい窓が一つあるだけで、ラプンツェルは、その頂上の部屋にあけくれ寝起きする身のうへになつたのでした。可哀さうなラプンツェル。一年経ち二年経ち、薄暗い部屋の中で誰にも知られず、むなしく美しさを増してゐました。もうすっかり大人になつて考へ深い娘になつてゐました。いつも王子の事を忘れません。」（4, 85以下）この部分はグリムでは「ラプンツェルは太陽のもとの一番美しい子供になりました。十二歳の時に、魔法使ひの女はラプンツェルを或る塔のなかへ閉ぢ込めました。その塔は森の中にあつて、梯子段もなければ戸もなく、ただ天辺に小さな窓が一つあるぎりでした。」⁽²⁹⁾である。グリムの場合はラプンツェルはまだ王子と出会ってはいないが、類似は強い。「剽窃」の要素があることは否定できないであろう。

太宰のラプンツェルは、魔法使いの呼びかけに応じて長い髪の毛を上から垂らすことはしない。グリムではもっとも印象深い場面がないのである。太宰の魔法使いは「魔法の翼」（4, 86）で塔に出入りする。ラプンツェルが十八歳になった時、王子は再び森に迷い込んで来て、ラプンツェルが「淋しさのあまり、月や星にむかつて歌」う歌に誘われて塔のところにやって来る。「ラプンツェルではないかしら。王子は、四年前の美しい娘を決して忘れてはみませんでした。」こうしてふたりは再会する。王子が上に行くのではなく、ラプンツェル自ら自分の黄金の髪の毛を切って、それにすがって降りてくるのである。グリムのラプンツェルに比べると、太宰のラプンツェルは行動的な性格が目だつ。「『ラプンツェル、こんどは私が君を助ける番だ。いや一生、君を助けさせておくれ』王子は、もはや二十歳です。とても、たのもしげに見えました。ラプンツェルは、幽かに笑つて首肯しました。二人は、森を抜け出し、婆さんの気づかぬうちにと急ぎに急いで荒野を横切り、目出度く無事にお城にたどりつく事が出来たのです。お城では二人を、大喜びで迎へました。」（4, 87以下）太宰にはグリムのような、塔の上で王子を待っていたのがラプンツェルではなく、魔法使いだったというはらはらせる場面はない。盲目になっていた王子の目にラプンツェルの涙がかかってまた眼がみえるようになるという場面もない。国で二人が喜んで迎えられたという結末が同じだけである。しかし構造的に見るならば、ラプンツェルと王子の出会い、魔法使いによる別離、そして再会であつて、グリムに従っている。しかしそれではグリムと同じく、話が完結してしまい、入江家の兄妹が物語を続けることは不可能になる。太宰が「その三」を休載してまで苦心したのは、この部分にかかわる。物語をこの先いかに展開するかという問題である。

この部分を受け持った弟について「失敗である。これでは、何も物語の発端にならない。おしまひまで、自分ひとりで書いてしまった。」（4, 88）とされているのはこの事情を物語っている。そこで末弟は祖母の助言を容れて「『けれども、これから不仕合せが続きます。魔法使ひの娘と、王子とでは、身分があまりに違ひすぎます。ここから不仕合せが起るのです。あとは大姉さんに、お願いいたします。ラプンツエルを大事にしてやつてください。』と祖母の言つたとほりに、書いてほつと溜息をついた。」（4, 89）としたのであるが、「その三」の執筆は難航した。「その三」では、お城で歓待されるラプンツエルが「あたしは、こんな身分ぢや無かつた、あたしは卑しい魔法使ひの娘だつた」（4, 92）ということを強く意識させられて、帰りたくなくて泣き出す。太宰はここではグリムの「十二人兄弟」（KHM9）の言葉を用いたのかも知れない。「十二人兄弟」では12人の男の子どものいる王さまが、13番目に女の子が生まれたら、男の子12人はみんな死なせてしまうと決心する。そこで母親である王妃は兄弟を森に逃れさせる。やがて女の子が生まれる。この一人娘はのちに12人の兄たちのことを知って探索の旅に出る。彼女は森の奥の家で兄弟と再会するが、ふとしたきっかけから兄弟はカラスに変身してしまう。兄弟を救うためには王女は7年の間、口をきくことも、また笑うことも許されない。彼女は森にやって来たどこかの王さまに求婚されて結婚するが、口はきかないし、笑いもしない。そのため腹黒い王の母によって火刑に処せられることになる。火が点けられ、着ているものに移りそうになる。その時ちょうど7年が経過して、兄弟であるカラスたちが次々と飛んできて人間にもどる。王妃は夫に自分の行動の理由をあかす。そこで王の母が逆に火刑にされる。このメルヘンで王の母は「『あなたが連れてらしつたのは身分の賤しい乞食の娘です。内証でどんな大それた悪事をやつてるかも知れたもんどぢやない。』⁽³⁰⁾という。この「身分の賤しい乞食の娘」という言葉が、太宰ではラプンツエルの言葉となっていると考えられる。

2

太宰が「ろまん燈籠」の「その二」で用いたのはグリムだけではなかった。「その二」ではアンデルセンの童話が大きく取り入れられている。「剽窃」という言葉はアンデルセンに関してこそふさわしいのである。「その二」では「アンデルゼン童話集」（Andersenの表記として当時はアンデルセンと平行していた。）の「雪の女王」からの「剽窃」が顕著である。「雪の女王」（1845）はアンデルセン（1805-75）の童話のなかでも日本でよく知られている童話のひとつであろう。

「雪の女王」とは、「悪魔の鏡が割れて世界中に破片が飛び散って、そのひとつが目に入って暖かい心を失ってしまった少年カイと、カイを捜し歩く少女ゲルダの物語⁽³¹⁾である。この

童話は「お話 その一」から「お話 その七」までとなっている。「雪の女王」の「その一」から「その四」までのあらすじはこうである。悪魔の鏡というものがあって、それは映った美しいものはみにくく、みにくいものはもっとみにくくしてしまう。割れた破片も同じ働きをする。ある町に兄と妹のように仲のよい少年カイと少女ゲルダがいた。バラの花が美しく咲く夏のある日、カイの目に鏡のかけらが入る。カイにとってバラはもはや美しいものではない。「『あそこの薔薇の花に、蟲が食つてるよ！それから、ほら、向ふのはゆがんでるよ。どれもこれも、きたない薔薇の花ばかりだなあ！』」⁽³²⁾と言って、カイはバラをむしりとる。カイは子供らしさをなくし、「自分を心から愛してゐる可愛らしいゲルダさへ、からかつたりするやうになりました。」そうした冬のある日そり遊びをしていたカイは自分の櫓を、そこにやって来た大きな櫓に結びつける。するとその大きな櫓はどんどん走り、カイは自分の櫓をほどくことができなくなる。こわくなったカイが祈りの文句を唱えようとしても、頭に浮かぶのは九九の表でしかない。鏡の破片のせいである。櫓がとまったところにいたのが、雪の女王である。毛皮も帽子も雪でできている「背の高い、すらりとした、輝くばかりに白い、一人の貴婦人」⁽³³⁾である。カイは女王にキスをされると、ゲルダのことは忘れてしまう。ゲルダはカイがいなくなったことを悲しんで、カイの行方を捜して舟で川を下る。そして、撞木杖にすぎたお婆さんの家に行き着く。少し気味がわるいお婆さんである。そしてお婆さんに髪をすいてもらったゲルダはカイのことを忘れてしまうのである。「といふわけは、このお婆さんは魔法を使うことが出来たからであります。けれども、性質の悪い魔法使いではなく、ただ自分の道楽に、ちょいちょい魔法を使ふだけでした。今も、ただ、ゲルダを手もとに置きたいばかりにさうしたのです。」⁽³⁴⁾ゲルダが家のことやカイのことを思い出すのは、花が咲く魔法使いの庭にバラの花だけが欠けていることに気がついた時である。魔法使いの女はゲルダが思い出すことを心配してバラを隠しておいたのであった。カイのことを思い出したゲルダがやっともとの世界に戻ると、そこはすでに晩秋である。出会った一羽のカラスによれば、カイは国の王女と結婚していて、ゲルダのことは忘れていらしい。ゲルダはカラス夫婦の手引きで城に忍び入る。しかしそこにいたのはカイではなく、別の王子と王女であった。ゲルダは王子と王女の黄金の馬車に乗ってカイ探しを続けることになる。

「お話 その五 山賊の小娘」では、ゲルダの黄金の馬車が森の山賊によって止められる。太宰はこの部分を「ろまん燈籠」の「その二」で大きく使用した。「剽窃」のおそれから「胸をどきどきさせ」たのはこの部分に違いないのである。アンデルセンは次のようである。「『ありや金だぞ！ 金だぞ！』と叫びながら、一時にどつと押し寄せた来ました。そして馬をつかまへ、先乗りや御者を殺し、ゲルダを馬車の中から引きずりだしました。『このあまっ子は、肥えてをるわい。可愛いあまっ子ぢや。胡桃の実で肥やしたんぢやな！』と、山賊の老婆が言ひました。この老婆は、長いこはい髭を生やしてをり、眉毛は目の上までかぶさつていま

した。『まるで、ふとらした子羊そつくりぢや！さて、味はどんなもんどちやろ。』かふ言ひながら老婆は、短刀を引きぬきました。・・・『あつ！』とその瞬間、老婆は声をあげました。なぜなら、自分のちいさな娘に、耳を噛みつかれたからです。小娘は老婆の背中にぶら下がって、仕様のない乱暴な子でしたから、面白がつてさうしたのです。『この餓鬼めが！』と母親は言ひました。そのためゲルダは、あやふく助かりました。『この女の子は、あたしと遊ぶんだよ！』と山賊の小娘は言ひました。『この女の子はあたしに、マフと、きれいな着物とをくれるの。そして、あたしといつしょに寝るのだよ！』かふ言つて、また噛みつきましたので、老婆は飛び上つて、きりきり舞ひをしました。・・・『あたし、あの馬車に乗るの！』と山賊の小娘は言ひました。この子は、あまやかされて育てられ、おまけに強情ときてゐるのですから、一度言ひ出したら、もう後へは引きません⁽³⁵⁾太宰はこの部分を「ろまん燈籠」で次のように「剽窃」した。鑑が金でできた馬に乗った王子が森に迷い込んで来る。「婆さんは、これを見のがす筈は、ありません。風のやうに家を飛び出し、たちまち王子を、馬からひきずり落してしまひました。『この坊ちゃん、肥えてゐるわい。この肌の白さは、どうぢや。胡桃の実で肥やしたんぢやな！』と喉を鳴らして言ひました。婆さんは長い剛い髭を生やしてゐて、眉毛は目の上までかぶさつてゐるのです。『まるで、ふとらした子羊そつくりぢや。さて、味はどんなもんどちやろ。冬籠りには、こいつの塩漬けが一ばんいい。』とにたにた笑ひながら短刀を引き抜き、王子の白い喉にねらひをつけた瞬間、『あつ！』と婆さんは叫びました。婆さんは娘のラプンツェルに耳を噛まれてしまつたからです。ラプンツェルは婆さんの背中に飛びついて、婆さんの左の耳朶を、いやといふほど噛んで放さないのです。『ラプンツェルや、ゆるしておくれ。』と婆さんは、娘を可愛がつて甘やかしてゐますから、ちつとも怒らず、無理に笑つてあやまりました。ラプンツェルは、婆さんの背中をゆすぶつて、『この子は、あたしと遊ぶんだよ、この綺麗な子をあたしにおくれ。』とだだをこねました。可愛がられ、わがままに育てられてゐますから、とても強情で、一度言ひ出したら、もう後へは引きません。」(4, 81) アンデルセンの「山賊の小娘」を「ラプンツェル」と変えただけだといえそうなほど類似している。「塩漬け」などという北国の生まれらしい太宰の発想はあるが、二人の女の子の口調もほとんど同一である。

アンデルセンの山賊の小娘と太宰のラプンツェルは身体や容貌も似ている。アンデルセンでは「山賊の小娘はゲルダと同じくらゐの背たけでしたが、肩はばが廣くて、ずっと強さうでした。肌はとび色をしてゐました。目はまつ黒で、どこか悲しみをたたへてゐました。」という部分が、太宰では次のようになる。「ラプンツェルは、王子と同じくらゐの背丈でした。・・・髪の毛は、・・・まるで黄金をつむいだやうに美事に光り、脚の辺まで伸びてゐました。顔は天使のやうに、ふつくりして、黄色い薔薇の感じでありました。唇は小さく苺のやうに真赤でした。目は黒く澄んで、どこか悲しみをたたへてゐました。」(4, 82) 「黄色い薔薇」の感

じの顔とは難しいイメージである。山賊の小娘の「とび色」の肌から由来するのだろうか。
 「目は黒く澄んで、どこか悲しみをたたへてゐました。」という太宰的な表現と思われるものが、実はアンデルセンに由来することはひとつの驚きである。ただアンデルセンの山賊の小娘については美しいという描写はないのに、太宰のラプンツェルは、王子にとって「今まで、こんな美しい女の子を見た事がない」ほどの美人であるとされている。太宰はラプンツェルを美しいと形容する必要があったのである。

「雪の女王」の山賊の小娘はゲルダを馬車で山賊の城に連れていく。途中の森の山賊の部分はすでに引用した。そこを過ぎて二人は馬車の上で会話をする。この部分もまた太宰は「剽窃」をしている。アンデルセンはこうである。「『あかし、お前が嫌ひにならないうちは、お前を殺させはしないよ。お前、きつと王女様なんだろ?』『いいえ!』とゲルダは言ひました。そして、今までのことをすつかり、それから、自分はどんなにカイちゃんを思つてゐるかを話しました。山賊の小娘はじつとゲルダを見つめてゐましたが、ちよつと、うなづいて『あたしがお前をきらひになつても、人に殺させはしないよ。さうなつたら、あたしが自分で殺すよ!』と言ひました。』⁽³⁷⁾やがて馬車は山賊の城に着く。「『今夜はあかしといつしよに、あたしの小さな動物のところに寝るんだよ。』と山賊の小娘は言ひました。二人は食べ物や飲み物をもらつて、廣間の隅つこに行きました。そこには、藁と毛布が敷いてありました。上を見ますと、梁や止まり木に、およそ百羽ほどの鳩がとまつてゐました。みんな、眠つてゐるやうに見えましたが、二人の娘が近づくと、少しからだを動かしました。『これはみんな、あたしのだよ。』と山賊の小娘は言ひました。そして、すばやく手近の一羽をつかまえて、足を持つてゆすぶりました。鳩は羽根をばたばたさせました。『キスしてやつておくれ!』娘はかう言うひながら、その鳩でゲルダの頬をうちました。『あつちのは、森のやくざ者だよ!』と小娘は相変らず話をつづけて、上の方の壁の穴に打ち込んである横木を指さしました。『あそこにあるあの二羽は、森のやくざ者でね、ちやんと閉ぢこめておかないと、すぐ飛んでつてしまふんだよ。それから、ここにあるこれは、あたしの古い友達のペーだよ!』かふ言うひながら一疋の馴鹿を角を持つて引き出して来ました。馴鹿の頬には銅の頸輪がはまつていて、それがつながれてゐました。『こいつも、しつかりしばつておかないと、あかし達のところから飛び出してしまふんだよ。毎晩、あたしはよく切れるナイフで、こいつの頸をくすぐつてやるんだ。すると、こいつはとてもこわがるんだよ。』かふ言つて小娘は壁の裂け目から長いナイフを取り出して、それで馴鹿の頬をなでました。可哀さうに、馴鹿は脚をばたばたさせました。山賊の小娘は、さもをかしさうに笑つて、ゲルダをつれて寢床にはいりました。『あなたは寝る時も、ナイフをはなさないの?』とゲルダは少しこはさうに、それを見ながら聞きました。『いつだつて、ナイフを持つて眠るよ。』と山賊の小娘は言ひました。『何が起こるか分からないもの。それはいいから、さあ、もう一度、さつきのカイちゃんつていふ子の話を

しておくれ。それから、どうしてお前がこの廣い世の中へ出て来たのかも話しておくれ。』⁽³⁸⁾ゲルダが話していると、山賊の小娘はナイフ片手にぐうぐう眠ってしまう。山賊たちが酒を飲んだり歌ったりして騒いでおり、老婆はとんぼ返りをしたりする。ゲルダはおそろしくて眠るどころではない、というのが「雪の女王」である。

太宰はこの部分を次のように利用した。ラプンツェルは「『お前があたしを嫌ひになつても、人に殺させはしないよ。さうなつたら、あたしが自分で殺してやる。』と言つて、自分も泣いてしまひました。それから急に大声で笑ひ出して、涙を手の甲で拭ひ、王子の目をも同様に乱暴に拭いてやつて、『さあ、今夜はあたしと一緒に、あたしの小さな動物のところに寝るんだよ。』と元気さうに言つて隣の寢室に案内しました。そこには、藁と毛布が敷いてありました。上を見ますと、梁や止まり木に、およそ百羽ほどの鳩がとまつてゐました。みんな、眠つてゐるやうに見えましたが、二人が近づくと、少しからだを動かしました。『これは、みんな、あたしのだよ。』とラプンツェルは教へて、すばやく手近の一羽をつかまへ、足を持つてゆすぶりました。鳩は驚いて羽をばたばたさせました。『キスしてやつておくれ!』とラプンツェルは鋭く叫んで、その鳩で王子の頬を打ちました。」(4, 83) アンデルセンの山賊の小娘も太宰のラプンツェルも鳩で相手の頬を打つという行為は同じであるが、しかし小娘は鳩にキスをしてくれとゲルダに言うだけであるのに対し、ラプンツェルは「鋭く叫ぶ」のである。性格の先鋭化が働いている。感情の起伏も激しい。そして太宰では次のように続く。「『あつちの鳥は、森のやくざ者だよ。』と部屋の隅の大きい竹籠を顎でしゃくつて見せて、『十羽ゐるんだが、何しろみんな、やくざ者でね、ちやんと竹籠に閉ぢ込めて置かないと、すぐ飛んで行つてしまふのだよ。それからここゐるのは、あたしの古い友達のベエだよ。』と言ひながら一疋の鹿を、角をつかんで部屋の隅から引きずり出して来ました。鹿の頸には銅の頸輪がはまつてゐて、それに鉄の太い鎖がつながれてゐました。『こいつも、しつかり鎖でつないで置かないと、あたし達のところから逃げ出してしまふのだよ。どうしてみんな、あたし達のところに、みつかないのだろう。どうでもいいや。あたしは毎晩、ナイフでもつて、このベエの頸をくすぐつてやるんだ。するとこいつは、とてもこはがつて、じたばたするんだよ。』さう言ひながらラプンツェルは壁の裂け目からぴかぴか光る長いナイフを取り出して、それでもつて鹿の頸をなで廻しました。可哀さうに、鹿は、せつながつて身をくねらせ、油汗を流しました。ラプンツェルはその様子を見て大声で笑ひました。」(4, 82以下) 山賊の小娘がラプンツェルという名前をつけられただけのようにさえある。トナカイ(馴鹿)が鹿に変更されただけで、鹿の名前ベイもアンデルセンそのままといつてよい。トナカイあるいは鹿がナイフでいじめられのも同じである。しかし太宰はラプンツェルに「どうして、みんな、あたし達のところに、みつかないのだろう。」(4, 83) といわせている。アンデルセンにはない言葉である。動物たちがみつからないのに不思議はないのに、ラプンツェルだけ

がその理由を理解できない。鹿をいじめながら大声で笑う彼女は、そのことを理解するだけの人間的な内面を有していない。それは彼女の外見の美しさと非常な対照をなす。上の言葉に続く「どうでもいいや」といったせりふは彼女のそのような性格を際立たせている。この言葉はアンデルセンの山賊の小娘が何度も口にする言葉である。しかし太宰のラプンツェルが人間的な内面を獲得することになるのに対して、アンデルセンの山賊の小娘にそれは起こらない。この点において太宰は「剽窃」とは無縁である。太宰が「剽窃」を意識して「胸をどきどきさせ」というのは、外面的な類似にすぎない。長くなるがなお太宰を引用する。上に部分である。「『君は寝る時も、そのナイフを傍に置いとくのかね?』と王子は少しはくなくて、そつと聞いてみました。『さうさ。いつだつてナイフを抱いて寝るんだよ。』ラプンツェルは平気な顔で答へました。『何が起るか分からないもの。それはいいから、さあもう寝よう。お前が、どうしてこの森の中へ迷ひ込んだか、それをこれから聞かせておくれ。』ふたりは藁の上に並んで寝ました。王子は、けふ森へ迷ひ込むまでの事の次第を、どもりどもり申しました。」太宰の王子は「雪の女王」の少女ゲルダが抱いた不安を引き継いでいるために「どもりどもり」話すのである。不安が共通の心理なのである。

アンデルセンの「雪の女王」のゲルダは、部屋にいた鳩からカイのいる場所を教えてもらうことができる。雪の女王とともに遠いラップランドにいるという。ゲルダはカイに会いたくてたまらない。「『あ々、カイちゃん! なつかしいカイちゃん!』ゲルダは溜息をつきました。『静かに寝なつてば!』と山賊の小娘が言ひました。『でない、このナイフを、わきつ腹に突き通すよ。』⁽³⁹⁾朝になってからのことは長くなるが、重要な場面なのでそのまま引用する。上に続く部分である。「朝になつてゲルダは、森の鳩の言つたことを、みな話しました。小娘はたいへん、まじめな顔つきをしてゐましたが、やがて、うなづいて言ひました。『どうでもいいや! どつちでもいいや。— で、お前、ラップランドはどこにあるか知つてるんかい?』と馴鹿にたづねました。『わたしぐらゐよく知つてる者はまづないでせう。』と馴鹿は言ひました。さうして、眼を生き生きと輝かせました。『そこでわたしは、生まれて育つたのですよ。そこの雪の平原を、わたしはとびまはつたのです!』『ねえ、お前!』と小娘はゲルダに向かつて言ひました。」⁽⁴⁰⁾小娘の「どうでもいいや」とか「どつちでもいいや」という口癖はそのまゝ太宰のラプンツェルの口癖となっていることがわかる。小娘によればいま家にいるのは母親だけであり、母親は酒を飲んで昼寝をするという。「やがて、母親が、壘のお酒を飲んで昼寝をするのを見すまして、小娘は馴鹿のところへ行つて言ひました。『あたしは、出来ればお前を、もつとナイフですぐつてやりたいんだよ。とても面白いんだもの。でも、どうでもいいや! お前の綱をといて、そとへ逃がしてやるからね、ラップランドへ行くがいいや。』」そう言つて山賊の小娘はトナカイにゲルダをラップランドに乗せていくように命ずる。「馴鹿は、あまりの嬉しさに思はず飛び上りました。小娘はゲルダに手を貸して、馴鹿の背に乗せてや

りました。そして、からだを馴鹿の背中にしつかりゆばへて、その上、小さな蒲団まであてがつてくれました。このやうに、いろいろ、先の先まで心配してくれました。『どうでもいいや！さあ、お前の毛の長靴。』と小娘は言ひました。『寒くなるからね。けれど、このマフはもらつておくよ！とても綺麗なんだもの！けれども、寒い目にはあはせはしないよ。これ、おつ母さんの大きな指なし手袋さ。お前なら、肘のどこまであるだろう。さあ、はめてごらん！ほうら、手だけ見ると、まるで、あたしのきたないおつ母さんみたいだ！』ゲルダは、嬉し涙をこぼしました。『そんな泣きつらするのはいやだよ！』と山賊の小娘は言ひました。『それよりか、嬉しさうな顔をするのがほんとしやないか。ここに、パンが二つと、ハムが一つあるからね。これで、お腹のすくはずもないよ！』この二つの品は、馴鹿の背中の方につけられました。それから、娘は戸を開けて、大きな犬をみんな、おびき入れました。『さあ、走れ！小さい女の子に気をつけるんだよ！』ゲルダは・・・『さようなら！』と言ひました。馴鹿は藪や草むらをとび越え、大きな森をつきぬけ、沼地や草原を越えて、急げるだけいそいで、どこまでも走りました。狼が吠え、鳥が叫びました。『シュー、シュー！』と空で大きな音がしました。丁度、何かが赤い火をはいてゐるやうでした。『あれは、わたしの昔友達の極光ですよ。』と馴鹿に言ひました。『ご覧なさい、よく光るでせう！』馴鹿は、今までよりももつと速く、夜となく、昼となく走り続けました。パンはもう食べてしまひました。ハムもなくなりました。その時、ラブランドに着きました。⁽⁴¹⁾

太宰はこの部分を次のように「剽窃」している。先の「どもりどもり申しました。」に続く部分である。『お前は、その家来たちとわかれて、淋しいのかい？』『淋しいさ。』『お城へ帰りたいのかい？』『ああ、帰りたいな。』『そんな泣きべそをかく子は、いやだよ！』と言つてラプンツェルは急に跳ね起き、『それよりか、嬉しさうな顔をするのが本当ぢやないか。ここに、パンが二つと、ハムが一つあるからね、途中でおなかがすいたら、食べるがいいや。何を愚図愚図してゐるんだね。』王子は、あまりの嬉しさに思はず飛び上りました。ラプンツェルは母さんのやうに落ちついて、『ああ、この毛の長靴をおはき。お前にあげるよ。途中、寒いだらうからね。お前には寒い思ひをさせやしないよ。これ、お婆さんの大きな指なし手袋さ。さあ、はめてごらん。ほら、手だけ見ると、まるであたしの汚い婆さんそつくりだ。』王子は感謝の涙を流しました。ラプンツェルは次に鹿を引きずり出し、その鎖をほどいてやつて、『ベエや、あたしは出来ればお前を、もつとナイフでくすぐつてやりたいんだよ。とても面白いんだもの。でも、もう、どうだつていいや。お前を、逃がしてやるからね。この子をお城まで連れていつてくれ。この子はお城へ帰りたいんだつてさ。どうだつて、いいや。うちの婆さんより早く走れるのは、お前の他に無いんだからね。しつかり頼むよ。』王子は鹿の背に乗り、『ありがたう、ラプンツェル。君を忘れやしないよ。』『そんな事、どうだつていいや。ベエや、さあ、走れ！背中のお客様を振り落したら承知しないよ。』『さやうなら。』『あ

あ、さやうなら。』泣き出したのは、ラプンツェルのはうでした。鹿は闇の中を矢のやうに疾駆しました。藪を飛び越え森を突きぬけ一直線に湖水を渡り、狼が吠え、鳥が叫ぶ荒野を一目散、背後に、しゅつしゅつと花火の燃えて走るやうな音が聞こえました。『振り向いては、いけません。魔法使ひのお婆さんが追ひ駆けてゐるのです。』と鹿は走りながら教へました。『大丈夫です。私より早いものは、流れ星だけです。でも、あなたはラプンツェルの親切を忘れちやいけませんよ。気象は強いけれども、淋しい子です。さあ、もう、お城につきました。』王子は夢みるやうな気持で、お城の門の前に立つてゐました。」(4, 84以下)パンとハムという食物も同じであるし、トナカイの走る音も同じである。しかしまのびした感じのないわけでもないアンデルセンに比べ、太宰の方ははるかに緊張感にあふれている。太宰は地中海地方にあった<ラプンツェル>型メルヘンの<呪的逃走>とか<魔法的逃走>といわれる要素を挿入することによって、アンデルセンには存在しない緊迫感を出すことに成功しているのである。メルヘンにおける<逃走>とは、人間が超自然的存在によって追われて、なんとか逃げ切るというものである。<ラプンツェル>型メルヘンについては、「すべての元来の伝承では愛しあふふたりが逃走し、その逃走に成功するという点が共通である。」⁽⁴²⁾とされる。太宰の場合ふたりの男女がいっしょに逃走するのではないが、しかし「雪の女王」では単に幻想的な効果を与えているだけにすぎないものを、メルヘン本来の<逃走>という場面に転換した。それは太宰のメルヘンについての知識もしくは感性を証拠だてている。またアンデルセンでは山賊の小娘がゲルダを解放する理由が不明であるが、太宰では明確である。太宰は「雪の女王」の山賊の小娘の言葉をそのままラプンツェルに口にさせ、しかもそれらの言葉によってラプンツェルの王子に対する内心の思いを表現するものとしているのである。馴鹿をいじめて苦しませ、その苦しみに全く理解が及ばなかった「山賊の小娘」が、太宰では「母さんのやうに落ちついて」王子の世話をするラプンツェルに変身する。この「母さんのやうに」という形容はアンデルセンにはない言葉である。グリムの「野萵苣(ラプンツェル)」で魔法使ひの女がいう「あたしはその子を母親のやうに世話してあげる」と約束する言葉が思い出される。ラプンツェルは王子を乗せて逃走するトナカイにもあれこれ注意を与える。そして王子と別れるにあたって泣き出す。山賊の小娘には見られなかった行動である。太宰のラプンツェルは単に外面的に美しいだけの存在から、人間的な感情内面をそなえた女性へと変容していく。太宰は「雪の女王」をほとんどそのまま利用しながら、あらたにわずかの言葉を付加することによって、この変容を印象づけることに成功している。そのことは王子と別れたあとのラプンツェルが「悲しい歌」(4, 86)を歌うことなどからも認められる。アンデルセンの人間的な内面のあまり感じられない山賊の小娘を、いかにして内面をそなえたラプンツェルに変えていくか。言動をほぼそのまま借用しながらのこの作業は容易ではなかったであろう。この作業は「剽窃」とは無縁である。

「ろまん燈籠」では王子を涙ながらに逃がしたラプンツェルが「魔法使ひの婆さん」によって塔に閉じ込められ、4年後に王子と再会し、森を抜け出して、お城にたどり着き、歓迎されることになる。グリムの「ラプンツェル」ならばこれで終わりとなる。しかし太宰はグリムから独立して、ここから別の物語を始めている。「ろまん燈籠」で末弟が担当した「その二」の物語の部分も本来ここで終るはずであったところ、それでは物語を続けるはずの残りの兄、姉がこまる。そこで「『けれども、これから不仕合せが続きます。魔法使ひの娘と、王子とでは、身分があまりに違ひすぎます。ここから不仕合せが起るのです。あとは大姉さんには、お願いいたします。ラプンツェルを大事にしてやつて下さい。』と祖母の言つたとほりに、書いてほつと溜息をついた。」(4, 89)として、「その二」を閉じたのである。アンデルセンの「雪の女王」もまた山賊の小娘によって解放されたゲルダが馴鹿に乗ってカイを探しに行く話が続く。「その一」から「その七」までである「お話」のうち、「その六」と「その七」の部分である。ゲルダは馴鹿に乗ってラップランドにたどり着く。馴鹿は途中でフィンランドの女のところに立ち寄って、雪の女王を負かしてカイをもとに戻すことができる力をゲルダに与えてくれるよう頼む。この女も不思議な力を持っているらしい。しかしその女によれば、自分が与えることができる力よりもゲルダが今現在有している力のほうがはるかに大きい。「あの子の力は、わたし達なんかから、教はるまでもないのだよ。それはゲルダの心のなかにあるの。つまり、ゲルダの清らかな無邪気な心が、とりもなほさず、力なのだよ。もしゲルダが雪の女王のところへ行つて、カイのからだからガラスの破片を取りのぞくことが出来ないやうなら、わたし達ではどうにも仕様がないうよ。」⁽⁴³⁾さらに進んだゲルダは押し寄せてきた雪の軍勢も、「主の祈り」を唱えることによって現れた天使たちのおかげで撃退できる。ゲルダは靴もはかず、手袋もしないでカイがいる雪の女王の城にたどり着く。雪の女王はエトナ山やヴェスヴィオ山に雪を降らせに出かけたばかりである。カイはひとりであるが、寒さも感じないで、満足な気分の状態である。ゲルダのことはまったく忘れてしまっている。ゲルダが抱きしめて叫んでも無感動である。しかしゲルダの涙がカイの胸にこぼれて氷を溶かし、心臓のなかにあった鏡の破片も食い尽くし、さらにゲルダが賛美歌を歌うと、カイは急に泣き出す。それによって眼からも鏡の小さな破片が洗いだされる。カイはゲルダに気がつく。カイに人間の心が戻ったのである。二人のよろこびは大きい。二人は帰る途中にフィンランドの女に会ったり、あるいは山賊の小娘にも出会ったりする。山賊の小娘は黄金の馬にまたがり、ピストルを帯にさしている。「家にゐるのにあきてしまつて」⁽⁴⁴⁾きままな旅にでたらしい。彼女は鳥の消息などを教えたあと、去っていく。この小娘の内面にはいささかの発展も認められない。ゲルダを突然に解放したのと同様に、その行動は衝動性が強いのである。カイとゲルダは歩いて自分たちの町に帰還する。二人は自分たちがもう大人になっていることに気がつく。「かうして、この二人の、大人でしかも子供は一心の子供は、そこにすわつて

みました。おりしも、時は夏のたけなは、あたたかい、恵み豊かな夏でありました」⁽⁴⁵⁾ゲルダの「清らかな無邪気な心」が全体を貫いてゆるがないものとなっていることがわかる。「雪の女王」では「山賊の小娘」は「お話その五 山賊の小娘」の主人公であるが、物語全体ではさほど意味のある登場人物とはいえない。ゲルダの「清らかな無邪気な心」の引き立て役であるというのは言いすぎだろうか。太宰はそのような「山賊の小娘」の言動を用いて、新しいラプンツェル像を創造した。それは創造であり、「剽窃」ではないのである。

太宰は「ろまん燈籠」の「その三」は王子の城における王子とラプンツェルの物語である。この部分を太宰はグリムからもアンデルセンからも自由に創作した。それが「ろまん燈籠」の「その三」から最後の「その六」までを形成する。太宰が「その二」に続く「その三」の執筆に苦労したらしいことはすでに指摘した。それはグリムからもアンデルセンからも独立した全くの創作であり、連載の休止を伴うほどの作業だったのだ。「その三」は入江家5人兄妹の長女が続ける話である。「王子とラプンツェルは、手を握り合つて魔の森から遁れ、広い荒野を飲まず食はず終始無言で夜ひる歩いて、やつとお城にたどり着く事が出来たものの、さて、それからが大変です。」(4, 90)というのが、長女の話の始めである。二人は王や王妃そして家来たちにも大歓迎される。ラプンツェルにはしかし香水の風呂や立派な衣服にはなじめない。家に帰りたくなって泣く。他人ばかりの城にいるのが淋しくて泣くのではない。「あの婆さんは決していい婆さんでは無いし、また、たとひ佳い婆さんであつても、娘といふものは、好きなひとさへ傍にゐて下さつたら、肉親全部と離れたとて、ちつとも淋しがらず、まるで平気なものでございます。ラプンツェルの泣いたのは、淋しかつたからではありません。それは、きつと恥づかしく、くやしかつたからであります。お城へ夢中で逃げて来て、こんな上等の着物を着せられ、こんな柔らかな蒲団に寝かされ、前後不覚に眠つてしまつて、さて醒めて落ちついて考へてみると、あたしは、こんな身分ぢや無かつた、あたしは卑しい魔法使ひの娘だつたといふ事が、はつきり判つて、それでゐたたまらない気持になり、恥づかしいばかりか、ひどい屈辱さへ感ぜられ、帰ります等と唐突なことを言ひ出したのではないでせうか。ラプンツェルには、やつぱり小さい頃の、勝気な片意地な性質が、まだ少し残つてゐるやうであります。苦勞を知らない王子には、そんな事の判らう筈がありません。」(4, 91以下)身分についての思いは先述のように、グリムの「十二人兄弟」(KHM9)の「あなたが連れてらしたつたのは身分の賤しい乞食娘です」に該当する文章である。ラプンツェルは「王さまの最上級の御馳走」(4, 93)も食べ方もわからないし、変な味がするばかりである。「青虫の五臓のサラダや蛆のつくだ煮」を食べなれているからである。しかしそのようなラプンツェルも宮廷の侍女が見れば「こんなに気高く美しい姫」(4, 92)はみたことがない。王子は王子で「溺れるほどに愛」(4, 95)する。ラプンツェルは王子の妃となり、やがてみごもる。

ラプンツェルには不安がある。子供が生まれたら王子は子供ばかりをかわいがって、自分を邪魔にするだろう。森のお婆さんのところに帰りたい。子供が生まれると自分はお婆さんになってしまうだろう。「『あたしは、育ちの卑しい馬鹿な女ですから、お婆さんになつて汚くなつてしまつたら、何の取りどころも無くなるのです。また森へ帰つて、魔法使ひにでもなるより他はありませぬ。』」（4, 97）ラプンツェルは自分は卑しい生まれであり、自分にはとりえはないと考えている。王子は王子で「『君は、ご自分の美しさに気が附かない。』」と不満をあらわにする。しかもラプンツェルは「『あなたは、なんにも御存じないのです。あたしは、このごろ、とても苦しいのです。あたし、やつぱり、魔法使ひの悪ひ血を受けた野蛮な女です。生れる子供が、憎くてなりません。殺してやりたいくらゐです。』と声を震はせて言つて、下唇を噛みました。」王子にもなんだかラプンツェルの口にしたことが本当になりそうな気がする。「あきらめを知らぬ、本能的な女性は、つねに悲劇を起こします。」（4, 97以下）ここまでが「その三」におけるラプンツェルにかかわる部分である。王子と再会して結婚までしたのに、ラプンツェルは悩む。ラプンツェルの悩みが深いほどに、のちの変容と救済はより強く刻印されることになる。太宰はラプンツェルの悩みをどのように構成するかに苦心したのである。

ラプンツェルは「その三」では、自分の生まれも含めてずい分と悩みをあらわにする。そして次男の担当である「その四」に続く。「その四」では男の子が生まれるが、母親であるラプンツェルは衰弱するばかりである。自分が死んでもそれで事態がおわりになりそうにない予感もするという。今にも死にそうなラプンツェルを前にして、王子は「『生きてみてくれ!』と呻き」（4, 106）、「『ただ、生きて、生きてだけ、ゐてくれ!』」とつぶやく。するとそこに魔法使いの老婆が出現する。娘のラプンツェルの命を助けに来たというのである。このような突然の出現はメルヘンにはよくあることである。老婆は「『魔法使ひの家に生まれた女の子は、男に可愛がられて子供を産むと、死ぬか、生きるか、でもなければ、世の中で一ばん醜い顔になつてしまふか、どちらかに、きまつてゐるのだよ。・・・お前さまは、一体、ラプンツェルを、どうなさるつもりだね。見殺しにするか、それともわしのやうな醜い顔になつても生かして置きたいか。』」（4, 107）とせまる。自分だってラプンツェルを生む前はラプンツェルに負けない綺麗な娘だった。「旅の猟師に可愛がられてラプンツェルを産んで」生きるか死ぬかを母親に問われて生きたいと答えたので、「まじなひ」のおかげで生き延びた。しかし「ごらんのとほりの見事な顔」になってしまったのだというのである。死にたいと言い張るラプンツェルと、生かしておいてくれという王子である。こうして次女の語る「その五」となる。「（王子は）『生かしてやつてくれ!』と油汗を流して叫びました。悪魔に膝を屈して頼み込んでしまつたのであります。しんから愛してゐる人のいのちを取りとめる為には、自分のプライドも何も、全部捨て売りにしても悔いない王子さま。」（4, 113）である。魔法使

いに「『わしのやうな顔になつても、お前さまは、やつぱりラプンツエルを今までどほりに可愛がつてあげるのだね?』と念を押されても、「『顔。私には、いまそんな事を考へてゐる余裕がない。丈夫なラプンツエルを、いま一度見たいだけだ。ラプンツエルは、まだ若いのだ。若くて丈夫でさへあつたら、どんな顔でも醜い筈は無い。』」と言う。「愛と美について」とは反対に、ここでは美は愛を支配するものとはされていないのである。ラプンツエルのほうも王子は好きであつたが、しかし「卑しい生れ」(4, 114)がかえつて意識されたという。「『あたしは、仕合せではなかつた。毎日毎日が、あたしにとつて地獄でした。』」というのである。「好き」であるがゆえに別れることはできない。だから死んでしまいたい。それを聞いた老婆は「『王子さまは、お前がどんなに醜い顔になつても、お前を可愛がつてあげると約束したのだ。たいへんな熱のあげかたさ。』」(4, 115)と言って、娘を生かすために魔法の祭壇を築く。そこに黒牛の皮の大釜をすえ、湯を沸かし、呪文を唱える。そしてラプンツエルの胸にナイフを突き刺すや、そのやせ細つた身体を煮立つた大釜の中に投げ込む。殺されるのかと思つた王子の悲鳴もかまわずに、魔法使いの老婆は汗みずくで呪文を唱え続ける。そして呪文が途切れ、釜の沸騰の音も止む。「王子は涙を流しながら少し頭を挙げて、不審さうに祭壇を見た時、嗚呼、『ラプンツエル、出ておいで。』といふ老婆の勝ち誇つたやうな澄んだ呼び声に應へて、やがて現はれた、ラプンツエルの顔。」(4, 116以下)これが「その五」の結末である。

3

連作の最終回の「その六」におけるラプンツエルと王子の物語の始まりは、「美人であつた。その顔は、輝くばかりに美しかつた。」(4, 117)である。「その六」は法学士の長兄の担当である。「—その顔は、ラプンツエルの顔ではなかつた。いや、やつぱりラプンツエルの顔である。しかしながら、病氣以前のラプンツエルの、うぶ毛の多い、野薔薇のやうな可憐な顔ではなく、(女性の顔を、とやかく批評するのは失礼な事であるが)いま生き返つて、幽かに笑つてゐる顔は、之は草花にたとへるならば、・・・まづ桔梗であらうか。月見草であらうか。とにかく秋の草花である。魔法の祭壇から降りて、淋しく笑つた。品位。以前に無かつた、しとやかな品位が、その身にそなはつて来てゐるのだ。王子は、その気高い女王さまに思はず軽くお辞儀をした。『不思議な事もあるものだ。』と魔法使いの老婆は、首をかしげて呟いた。『こんな筈ではなかつた。蝦蟇のやうな顔の娘が、釜の中から這つて出て来るものとばかり思つてゐたが、どうもこれは、わしの魔法の力より、もつと強い力のものが、じやまをしたに違ひない。わしは負けた。もう、魔法も、いやになりました。森へ歸つて、あたりまへの、つまらぬ婆として余生を送らう。世の中には、わしにわからぬ事もあるわい。』さう言つ

て、魔法の祭壇をどんと蹴飛ばし、暖炉にくべて燃やしてしまった。祭壇の諸道具は、それから七日七晩、蒼い火を挙げて燃えつづけてみたといふ。老婆は、森へ帰り、ふつうの、おとなしい婆さんとして静かに余生を送つたのである。」(4, 118)魔法使いの老婆は、娘のラプンツェルがひどく醜い顔になって生き返ると確信していた。しかしそうはならなかった。魔法使いが認識せざるをえなかった「わしの魔法の力より、もつと強い力」が働いたのである。太宰はこのような「力」の存在を読者に確信させようとしている。「王子の、無邪気な懸命の祈りは、神のあはれみ給ふところとなり、ラプンツェルは、肉感を洗ひ去つた気高い精神の女性として蘇生した。」(4, 119)とは、ラプンツェルが内面的発展を遂げたということの意味しているのである。

グリムの「ラプンツェル」の女魔術師は悪くなく、「純潔を守るため娘を塔に閉じ込めていたのに、男性と密会」⁽⁴⁶⁾されたのであり、娘のラプンツェルは「王子の存在をみずから告白する馬鹿な娘」であるというジェンダー的解釈とは、太宰のメルヘン解釈は無縁である。「危機におちいった乙女が塔の窓から身を乗り出し、救いがこないかとはるか彼方に目を走らせている—おとぎ話という言葉を聴いて一般の人びとがまず心に浮かべる、広く行き渡ったイメージといえまさにこれに尽きるだろう」⁽⁴⁷⁾というのも同じジェンダー的解釈である。また子供にとって自分になにかと干渉する親がうとましくしか感じられず、「魔物」⁽⁴⁸⁾に見えたのである。母親は子供に悪い虫がつくのを恐れて世間から隔離したのであって、それは「娘に対する一種の処女願望の表れ」であるという解釈は、ジェンダー論者からどう思われるだろう。「ラプンツェル」が子供の時から好きだったという太田治子の「このおばあさんは、少しも悪い人にみえませんでした。今も、その考えは、まちがっていたとは思いません。世の母親の、娘を大事に家の中にしておきたいという気持と、このおばあさんの気持ちには、同質のものがあるように思えるからです。そして、塔の中のラプンツェルのもとに、王子がしので会いに来ているとわかったときのおばあさんの怒りは、ある日突然娘から結婚を打ち明けられたときの母の驚き、といってもいいのだと思います。」⁽⁴⁹⁾という感想は、ジェンダー論者から批判をうけるだろう。

「(心理学の立場から言えば)ラプンツェルの話は発展の段階を描いたものである・・・発展はいくつかの段階を経て行われる。そのひとつひとつの移り目に危険と困難と不安が結びついている。しかし危険は克服され、発展は明るい世界へのびる。」⁽⁵⁰⁾というリュウティの考えは、太宰にもあてはまるように思われる。太宰のラプンツェルは克服された危険と困難と不安の象徴そして発展の象徴と見ることができるからである。それはヨレスがいうところの「メールヒェンの精神活動」⁽⁵¹⁾と言い換えることもできるだろう。ヨレスによればメルヘンが人間にもたらす「充足感」は「私たちがこの世で起こるべきであると感じることが、物語の中で起きることに端を発するのである。・・・最後の充足感は、・・・出来事全体が、世界の

公正な成り行きに対する私たちの期待や要求に一致することによってもたらされるのである。世界の中では、本来どのように事が運ぶべきか、この期待がメールヒェンの形式にとって決定的であると思われる。そして、それがメールヒェンの精神活動である。」という。大釜の中から現れたラプンツェルの美しい顔は読者の期待に一致している。王子は「蝦蟇のやうな顔」になってラプンツェルが蘇生したとしても、彼女を愛したであろうこともまたたしかである。「愛と美について」とは反対の結論である。「愛と美について」と「ろまん燈籠」は同じ家庭が舞台とされただけではなかった。「愛と美について」では博士のかつての妻の抱いた犬は「これは、ひどいね。蛹でも食つて生きてゐるやうな感じだ。」(2, 345)といわれている。一方「ろまん燈籠」でラプンツェルが食べなれたとされる食物は「青虫の五臓のサラダや蛆のつくだ煮」(4, 93)である。太宰はふたつの小説に同じ要素を盛り込みつつ、結論は逆に行っているのである。そしてラプンツェルが魔法使いの力を破って、美しい顔で蘇生することによって、読者の満足感はいっそう高まる。太宰は、「世界の中では、本来どのように事が運ぶべきか」ということを「ろまん燈籠」の中で物語っている。それは「魔法の力より、もっと強い力」に対して太宰が抱いていた憧憬のあらわれと見ることができる。小説が「あまい、ロマンチックとでもいつたやうな匂ひ」の作品になったのも不思議はないのである。このように考えるならば太宰は「肉感を洗ひ去つた気高い精神の女性」の創造をめざしたのではなく、そのような不思議を出現させるもの、ヨレスのいう「メルヘンの精神活動」にあたるものを表現しようとしたといふことができるのである。大釜から現れたラプンツェルが「気高い精神の女性」であるというのは、言葉だけの表現にとどまっていることに注意しなければならない。そして魔法使いの女の魔法が破れたことがいっそう注目されるべきであろう。グリムにおけるラプンツェルと王子の再会も、そしてラプンツェルの涙の作用による盲目からの回復もすべて、太宰の魔法使いの老婆がいうところの「魔法の力より、もっと強い力のもの」の作用による。この言葉はヨレスやリューティが言ったとしてもおかしくない。このことを表現するためには、「ろまん燈籠」は「その三」以降の内容が重要だった。そして「その二」から、「その三」以降への展開は容易ではなかった。「その三」の休載の理由はここにあって考えられるのである。

ラプンツェルの顔が醜くなるはずだったという設定はグリムの「水晶の珠」(KHM197)を思い出させる。魔法使いの女に三人の男の子がいるが、長男と次男は母によって驚と鯨に変えられてしまう。母は自分の権力が奪われるのを恐れたのである。変身させられる前に逃げ出した三男は、黄金の太陽の城(金陽城)で魔法をかけられているという王女を救いにでかける。失敗したら死である。しかし三男が首尾よく王女の部屋に到達すると、そこにいたのは顔は灰色、しわだらけ、目はどんよりで髪は赤い女性でしかない。三男が驚いて「『あなた

が、あの美しいので世界ぢう大評判のお姫さまなのですか』⁽⁵²⁾とたずねると、「『これはわたしの姿ではないの。人間たちの眼にはわたしはこんな醜い姿にしか見えないの。』」というのが答である。しかし王女が持っている鏡に映して見ると、非常に美しい王女の本当の顔が見える。この王女を救う手段としては水晶の珠があるという。この珠は暴れ牛の腹中の火の鳥の中に卵としてある。もしそれが地面に落ちたらすべては燃え尽きてしまうのである。そこで三男は牛を退治し、牛から飛び立った火の鳥は長男の鷲が襲う。燃え上がった火は次男の鯨が大波をたてて消す。卵は無事拾い出される。こうして三男が水晶の珠を魔法使いである母のところを持って行く。「『わしの法力は破られた、お前は今から黄金の日の城の王ぢや。』・・・王女のお室へはいりましたら、王女は天の為せる美しさに輝いて立つてみました。両人は嬉しよるこんで指環を取りかはしました。』⁽⁵³⁾と言う。兄たちも人間の姿にもどる。「法力は破られた」とは、「ろまん燈籠」の「『わしの魔法の力より、もつと強い力のものが、じやまをしたに違ひない。』」という言葉によく類似している。太宰のグリムのメルヘンについての深い知識をうかがわせる。魔法使いの母言葉は太宰そのままであるとさえ言える。

アンデルセンの「沼の王の娘」も忘れてはならない。エジプトから北方へ白鳥の姿で飛んできたお姫さまが、白鳥の衣服を失う。一緒にやって来た二人の姉にだまされたのである。沼の花でエジプトの王である父親の病気が治ると信じて飛んできたのである。そしてその涙が沼のはんの木に落ちると、その木によって沼の底に引きずりこまれてしまう。はんの木は野蛮な沼の王なのである。やがて沼の中からお姫様に似た赤ん坊が出てくる。それはお姫様と沼の王の間の子供である。この女の子はコウノトリによってバイキングの家に預けられる。その家で女の子は夜になると「大きなみにくいひき蛙」⁽⁵⁴⁾に変身し、それを叩こうとすると悲しい眼をして、またかわいい赤ん坊に戻る。この赤ん坊は昼はかわいい赤ん坊の姿であるが、ここは荒々しく、夜は姿は醜いヒキガエルだが、心はやさしいのである。赤ん坊はヘルガという名前をつけられ、美しいがただけしい18歳の女性に成長する。そして夜にはヒキガエルに変わる。ヘルガはある日キリスト教の若い坊さんが捕まった時も、「『犬を放して、犬どもに、沼や草地の上を、あの坊さんを追っかけさせるの！きつと面白い見物よ！後について行ったら、なほ面白いでせうよ！』」⁽⁵⁵⁾という。坊さんをバイキングの神のいけにえとして捧げる役もかってでる。準備の場に走り込んで来た犬のわき腹にナイフを突き刺して平然としている。しかし夜には育ての親であるバイキングの母親の涙に動かされ、とらわれの坊さんのもとに這って行く。そしていっしょに馬に乗って逃げ出す。ヘルガは朝になってからも坊さんの力に負け、のろいをといてもらうためにさらに二人で進む。夕方に荒野で盗賊の一団と遭遇し、坊さんはヘルガをかばって殺され、ヘルガは蛙になって逃れる。ヒキガエルのヘルガは坊さんの遺体の傍らで涙を流していたが、昼間になってもなにか悲しみをおぼえている。そしてヘルガは自分のように美しい母親と再会し、エジプトに渡る前にバイキングの

母の許に寄る。彼女はみにくいヒキガエルの姿のヘルガを抱きしめる。そこに死んだキリスト教の坊さんが現れたので、ヘルガが「キリスト様！」⁽⁵⁶⁾と口にしたとたん、その蛙の皮は取れる。そこにいるのは優しそうな目をした美しい娘のヘルガである。それは夢かもしれないが、ヘルガは母親と白鳥の姿になってエジプトへ飛び立つ。エジプトの王のところで二人は白鳥の皮を脱ぎ、母と子の人間に戻る。王の病気も回復し、ヘルガはアラビアの王子と結婚する。しかしヘルガはキリスト教の天国のことが忘れられない。ヘルガは天国の父のところへ、朝日をあびて昇っていく。

ホームズはどうだろうか。太宰自身が「ホームズの冒険」と告白していることからしても、まずドイルの小説集「シャーロック・ホームズの冒険」が検討の対象となる。昭和初期から一種のホームズブームが起こったとおぼしく、昭和4年には平凡社から6冊本、昭和6年から8年にかけては改造社からドイル全集全8巻が出版された。昭和10年10月には再び平凡社から「冒険探偵シャーロック・ホームズ」全6巻が出版された。いちどきにと6冊というのが人気の程を示している。昭和11年から13年にかけては岩波文庫から3冊本が出版された。そして昭和12年には新潮文庫本1冊などが続くのである。「ろまん燈籠」につながる「愛と美について」の結末は、母が「そつと立つて障子をあげ、はつと顔色かへて、『おや、家の門のところに、フロツク着たへんなおぢいさん立つてゐます。』 兄妹五人、ぎよつとして立ち上つた。母は、ひとり笑ひ崩れた。」(2, 350)である。実際に「へんなおぢいさん」がいるわけではなく、単に母の冗談にすぎない。しかしこの言葉には兄妹だけでなく、読者をも一瞬驚かせる効果がある。五人の物語の主人公の老教授が実際に現れたかのようにして、母親は五人をぎよつとさせたわけであるが、このような効果の使い方はホームズゆずりのものではないだろうか。「ホームズの冒険」に収録されている「ぶな屋敷の冒険」に類似の場面を見出すことができる。髪の毛の色が栗色であるがゆえに高額の報酬で家庭教師に雇われたらしいハンターという独身女性がホームズの依頼人である。彼女は別の女性の身代わりにされたのであって、田舎屋敷の窓辺でそのふりをさせられる。不審に思った彼女が盗み見ると、近くの街道にだれか人がいるのが見える。「一人の男が立っていまして、どうやらこちらをみているらしいのが鏡にうつりました。鼠いろの服を着て顎鬚のある小柄な男でございます。」⁽⁵⁷⁾顔ははっきりとは識別できない程度の距離がある。ここからホームズの推理が始まり、なぞは解明される。ほんものの女性は屋敷の別棟の座敷牢に監禁されていたのである。太宰の「ラプンツェル」物語と監禁も共通である。この作品は日本では昭和3年の「新青年」夏季増刊号に「ぶな屋敷」(延原謙訳)として訳出されたのが最初のものである。「ぶな屋敷の冒険」は上記の岩波文庫には未収録である) 同じ「ホームズの冒険」の「花嫁失踪事件」ではセントサイモン卿というイギリス貴族が花嫁に逃げられる。アメリカで知り合った花嫁ドーラン

は、鉱山で成功した富豪の娘である。彼女の父は彼女が20歳を過ぎてから成功したので、彼女はそれまで山や森を自由に駆け回っていた。太宰がどの本で読んだのかは不明なので、新潮文庫の延原謙訳を引用する。「性格はこの国でいうおてんば娘とでも申しますか、一種の強い、野育ちの自由さがあり、どんな伝統にも拘束される女ではありません。剽悍というか、火山のような気性の女です。」⁽⁵⁸⁾しかし「心底はけだかい女なのです。いざとなれば一身を犠牲にするヒロイズムもあり、いやしくも不名誉なことは嫌忌する女だと信じています。」というのが卿の説明である。そのために彼女と結婚したのであるという。ワトソンが写真を見れば美しい黒髪、大きな黒眼の美人である。彼女についてなされる説明は太宰の物語の主人公クラプツェルを彷彿とさせるところがある。その花嫁が結婚式の直前の出来事から失踪し、行方不明となってしまう。そして事件は意外な展開となる。探偵小説めいた作品を匿名で発表したこともある太宰であるから、ホームズは身近かなものだったのである。

あらためて読むとドイルには顔に関する作品が少なくないことに気がつかされる。「ホームズの思い出」の「黄いろい顔」はかつてアメリカでアフリカ系の男性と結婚し、まっ黒な娘のいることを夫に隠すイギリス女性の話である。夫がその事実を知らないままに垣間見た少女は「容貌ははっきりしませんけれど、何かこう奇怪な、残忍なものがあつたのです。」⁽⁵⁹⁾という。少女と対面したワトソンも少女の顔を見て「驚きと恐怖の叫び声」⁽⁶⁰⁾をあげるほどである。それが黄色い、表情のない不気味な顔をしていたからである。少女は黒い顔を隠すために仮面を被らされていたのである。「背の曲がった男」は「しなびたリンゴのようにしわだらけ」⁽⁶¹⁾の「まっ黒けなおそろしい顔」の男が不意に出現する。「シャーロック・ホームズの帰還」の「美しい自転車乗り」には「恐ろしい顔がいつそう醜くなっています。」⁽⁶²⁾という男が美しい自転車乗りの女性ミス嬢をおびやかす。「シャーロック・ホームズの事件簿」の「高名な依頼人」では、美男の男爵が女性によって、顔に硫酸を浴びせられ、顔が無残に腐食するという話である。「這う男」は若返りの薬によって行動や動作が猿に変身したようになってしまう61歳の教授が主人公である。教授は自分の娘の3階の部屋に外壁をよじ登ったりする。顔つきも狂ったようになっている。そして「覆面の下宿人」はライオンに顔に噛み付かれた女性が主人公である。「意識がもどりまして、私は鏡で自分を見ましたときあのライオンをのろいました。どんなに恨みましたことか！私の顔から美しさをかみとったからではなく、いつその生命をかみつぶしてくれなかったのを恨んだのでございます。」⁽⁶³⁾このようにホームズものには顔に関する記述が目立つ。ホームズでは顔は登場人物の秘密に直接結びつくものとしてある。顔とその顔の持ち主の内面の関係が扱われている。同じことは太宰の物語についても指摘できるのである。

しかしなによりも指摘されるべきはホームズものの構造と「ろまん燈籠」の構造の一致である。たとえば「ぶな屋敷の冒険」では、ホームズとワトソンが例によって暖炉の前でくつ

ろいでいる場面から始まる。これは「ろまん燈籠」の入江家の団欒そのままである。そこにハンター嬢が相談にやってくる。ハンター嬢の語る内容がそのまま事件の物語となる。ハンター嬢の物語の合間に、ホームズとワトソンの行動が説明され、そしてまたハンター嬢の物語る事件の経緯となる。これらすべてを読者に提供しているのは、ワトソンである。これを「ろまん燈籠」に適用するならば、太宰はワトソンであり、5人の兄妹がハンター嬢ということになる。しかしホームズについても太宰は「胸をどきどきさせ」る必要はなかったのである。構造を「剽窃」しただけだからである。

おわりに

太宰は「ろまん燈籠」をグリムの「ラプンツェル」やアンデルセンの「雪の女王」そしてホームズものを利用して書いた。「剽窃」的な要素はあっても、それは外面だけの問題にとどまっている。太宰はそれらを利用してながら、新しい人物像を創造した。それは連載の休載を伴ったとはいえ、「剽窃」とは無縁な行為である。太宰にとって愛は美とは結びつかないのであり、大事なものは「心の住む世界」である。それはいかにも「あまい、ロマンチック」な世界であるということではある。しかしそのように思う者にとっては魔法使いの「魔法の力」よりも強いものがはたらく。それは我々の期待を充たし、満足感を与えてくれる。それはまさにメルヘンの作用にほかならない。太宰はヨーレスのいう「メルヘンの精神活動」を作品によって体現しようとしている。そのようなことを信じるのが太宰には可能であった。ここに太宰文学の特質を見ることができるのである。

注

- 1) 使用した全集は「太宰治全集」筑摩書房、1989年—1992年出版。以下においては巻数とページ数を文中において、アラビア数字で示す。(4, 385)とは、第4巻385頁であることを示している。
- 2) 「婦人画報」(東京社)第四百四十四号の「編集後記」(2月号であるが、表紙には「二月」とのみある。表紙は海老原喜之助の絵である)
- 3) 田中英光「生命の果実」(津軽書房、1994, p.62: 「師太宰治」)
- 4) 同上, p.64
- 5) 堤重久「太宰治との七年間」(筑摩書房、1969, p.14)
- 6) 津島美知子「回想の太宰治」(人文書院、昭和53年, p, 31)
- 7) 堤, 同上書, p.62
- 8) 堤重久「恋と革命, 評伝太宰治」(講談社現代新書, 昭和48年, p.91)
- 9) 津島, 同上書, p.31

- 10) 堤「太宰治との七年間」, p.7以下参照
- 11) 奥村淳「太宰治とグリムのメルヘン—作品集『ろまん燈籠』におけるメルヘン・昔話の論理—」(「山形大学紀要(人文科学)」第15巻第3号, 平成16年2月)参照。
- 12) 「グリム童話集 第一冊」(金田鬼一訳)(岩波文庫, 昭和4年第一冊発行, 昭和22年12月第19刷発行, p.107)
- 13) 同上, p.108
- 14) 同上, p.109
- 15) 同上, p.111
- 16) 同上, p.111以下
- 17) 同上, p.113
- 18) 同上, p.114
- 19) Hrsg.von Hans-Jörg Uther:Brüder Grimm,Kinder- und Hausmärchen. Nachweise und Kommentare.(Eugen Diederichs Verlag,1996)S.28
- 20) 「明治期グリム童話翻訳集成」(アイアールディー企画, 1999) 第1巻, p.271
- 21) 「グリム名著選」(「模範童話集」8; 童話研究会訳, 博文館, 大正14年) p.101
- 22) 同上, p.107
- 23) 同上, p.109
- 24) 「グリム童話集」(金の星児童文庫5)(金の星社編集部訳,p.91)
- 25) 同上, p.97
- 26) 同上, p.99
- 27) 「グリム童話集」(金田訳, 岩波文庫, 昭和13年)第1冊,p.8
- 28) 同上, p.28
- 29) 同上, p.109
- 30) 「グリム童話集」(「世界童話大系, 第2巻独逸篇; 金田鬼一訳; 世界童話大系刊行会, 大正13年; 平成元年復刻版, p.65)
- 31) 「集英社世界文学大事典」1(集英社, 1996, p.67)
- 32) 「アンデルセン童話集(二)」(大畑末吉訳)(岩波文庫, 昭和14年1月, p.221)
- 33) 同上, p.224
- 34) 同上, p.230
- 35) 同上, p.251
- 37) 同上, p.252
- 38) 同上, p.253以下
- 39) 同上, p.255
- 40) 同上, p.256
- 41) 同上, p.256以下
- 42) Walter Scherf:Das Märchenlexikon,Bd.2,C.H.Beck,S.971
- 43) 「アンデルセン童話集(二)」, p.261

- 44) 同上, p.269
- 45) 同上, p.271
- 46) 野口芳子「グリム童話の魔女, 魔女裁判とジェンダーの視点から」(勤草書房, 2002, p.105)
- 47) ルース・ボテックハイマー「グリム童話の悪い少女と勇敢な少年」(紀伊国屋書店, 1990, p.175)
- 48) 金成陽一「グリム童話のなかの怖い話」(大和書房, 1996, p.117)
- 49) 太田治子「メルヘンの花束」(吉野教育図書, 昭和57年, p.196以下; ろまん新書24)
- 50) マックス・リュウティ「昔話の本質」(野村滋訳)(ちくま学芸文庫, 1994, p.153以下)
- 51) アンドレ・ヨレス「メールヒェンの起源」(講談社学術文庫, 1999, p.347)
- 52) 「グリム童話集, 下巻」(金田鬼一訳)(世界童話大系普及版, 第50巻, 金成堂, 昭和6年, p.504以下)
- 53) 同上, p.506以下
- 54) 「アンデルセン童話集(五)」(昭和16年2月第一刷発行, 昭和27年第六刷発行, p.174)
- 55) 同上, p.196
- 56) 同上, p.217
- 57) コナン・ドイル「シャーロック・ホームズの冒険」(延原謙訳)(新潮文庫, 昭和28年発行, 平成4年81刷, p.367)(以下すべて延原訳である)
- 58) 同上, p.317
- 59) ドイル「ホームズの思い出」(新潮文庫, 平成10年, p.61以下)
- 60) 同上, p.78
- 61) 同上, p.193
- 62) ドイル「シャーロック・ホームズの帰還」(新潮文庫, 平成6年, p.99)
- 63) ドイル「シャーロック・ホームズの事件簿」(新潮文庫, 平成3年, p.325)

DAZAI Osamus “RomanTourou(RomanenLaterne)”

— Andersen,Grimm,Holmes. Logik des Plagiats —

OKUMURA Atsushi

Hier wird versucht,wie Dazai Osamu für seine Novelle “RomanTourou(RomanenLaterne)” sowohl Stoffe als auch Motive von Andersen, Grimm und Doyles Holmes genommen hat. Nach dem Dichter selbst habe er, beim Schaffen in Not geraten, von diesen Dichtern manches gestohlen. Er nannte seine Tat sogar “böse Tat” und “Plagiat”. Diese “böse Tat” erweckte in ihm vielleicht Gewissensangst.

In der Novelle “RomanTourou” spielen ein Mädchen und ein Prinz Hauptrolle. Dieses Mädchen heisst Rapunzel. Sie begenet einem Prinzen und fällt in Liebe. Das ist auch der Fall des Prinzen. Dazai hat auch die Zauberin des Grimms Märchen “Rapunzel” nicht vergessen. Also hat der Dichter Personen und Handlungen von Grimms Märchen entliehen. Aber dass Dazais Rapunzel so wild und aktiv charakterisiert ist, gibt den Lesern den anderen Eindruck. Denn Grimms Rapunzel ist so altmodisch frauenhaft,dass sie zur Zeit die Anhänger der Frauenemanzipation irritiert. Dazai hat für seine Novelle auch Andersens Kunstmärchen “Schneekönigin” benutzt. In diesem Märchen tritt vor die Leser ein wildes Mädchen “Mädchen des Banditen”. Sie spielt keine Hauptrolle. Nebenperson könnte man diese Hummel nennen. Sie ist frank und frei.Sie ist sehr wild.Was sie dem Prinzen sagt, sagt auch Dazais Mädchen Rapunzel. Die Haltung des Banditenmädchens gegen Vogeln und ein Rentier erinnert die Leser an Dazais Rapunzel. Das Rentier bei Andersen zeigt sich bei Dazai als Reh. Beide Tiere tragen denselben Namen.

Dazai hat aus beiden Mädchen ein neues Frauenbild gestaltet und damit seine Sehnsucht nach etwas Höherem gezeigt. Man darf nicht Dazais Tat als “Plagiat” bezeichnen. Dieses hohe Wesen ordnet die Weltengänge an, in der Weise, wie sie unserern Erwartungen nicht entgegenlaufen. Dies soll besonders in Märchen geschehen. Das war auch Dazais Überzeugung, dass seine Novelle “Roman Tourou” “süß und märchenhaft” ist.

Dazai hat auch Conan Doyles “Sherlock Holmes” benutzt. Es ist zu betonen, dass die Konstruktion von Dazais Novelle dieselbe von “Holmes” ist. In “Holmes” macht Watson Schreiberrolle und erzählt den Lesern ein Verbrechen, dessen Rätsel Holmes gelöst hat. In Dazais Novelle spielt dieselbe Rolle der Dichter selbst und Familie Iries fünf Geschwister erzählen Reihen nach die Geschichte des Mädchens Rapunzel.